

希望を耕す

平成の三〇年

東京大学 特任教授・建築学

松村秀一

Shuichi Matsumura

渋谷でキング・クリムゾン

平成最後の年の暮れ、奇遇と言えば奇遇かもしれないが、平成最初の年にオープンした渋谷・Bunkamuraのオーチャードホールに初めて出かけた。今年で結成半世紀になるプログレッシヴ・ロック界のレジェンド、キング・クリムゾンのコンサートがあるからだ。

これまた平成絡みの話になるが、平成最後の私の誕生日に、勤務先である東京大学建築学科を平成最初の年に卒業した数名の方と飲み会を楽しんだ。その折に、サプライズの誕生日プレゼントとしてキング・クリムゾンのコンサート・チケットをいただいた。私がずっとファンだったことを誰かが知っていてくれたのだ。教え子たちの細やかな気遣いに感謝感激だった。

平成最後の年の瀬に思い返してみると、私は平成の最初から最後まで同じ職場に勤めていたことになる。何とも変化のないことだ。その中で、平成元年に卒業した学年は、私が初めて講義を受け持った学年で、年齢も一〇歳程しか変わらない。親しみのある学年だ。

当時はバブル経済の真ただ中、ほとんどの

学生がきちんと講義に出席している平成末の今

日は全く様子が違っていた。午前八時半から始まる私の建築構法の講義に初めから出席している学生は皆無ということもあった。若手の教員の間で「どうすれば、今の学生たちは講義に出てくるのか」を、本格的なワーキング・グループを設けて議論したこともあった。

しかし、開始時から講義に出席していたかどうかはともかく、平成元年の卒業生たちは今や五〇代になり、各方面で活躍、大した学恩がある訳でもない当時の若造教員の私にまで、冒頭の話のようなサプライズの誕生日プレゼントをしてくれるような徳のある人たちになっている。その背景に、それぞれの個人の能力や人間性があることは間違いないところだが、平成という時代が彼らを育て上げたこともまた間違いのない事実である。

平成元年卒業の方々の職場

私との飲み会に参加してくださった平成元年卒業の方々を職業で見ると、自分で建築設計事務所を経営する人、組織設計事務所に勤める人、住宅メーカーに勤める人、大学で教えている人、

情報系のコンサルティング会社を経営する人と同様々だ。

ちなみに、最新の同窓会名簿で彼らの学年の現在の所属先を見てみると、最も多いのが本誌の発行者とも言える大手ゼネコン。所属が不明の人を除いた五〇名弱の中で、二八%をも占めている。この中には、建設現場で施工管理技術者として活躍する人もいれば、設計部門や開発部門、更には研究部門で活躍する人もいる。二番目に多いのが、建築設計事務所と大学・公的研究機関で一七%。まとめ方が恣意的で恐縮だが、それに続くのは、不動産・鉄道系と、情報・経営コンサルタント系とで、それぞれ一%を占める。バブルの影響もあって、金融・保険・証券系が結構いるという先入観があったが、今やその種の業界で働いている人は二%にすぎない。こうした構成は、昭和五十五年卒業の私自身の学年とそう大きく変わることはない。ゼネコンで働く人等は、むしろ平成元年卒業の方が多くらいだ。案外オーソドックスな構成だと言える。

平成後期卒業の方々と比較

それでは、その後平成の間にかつてのオーソ

ドックスな構成は変わってしまっただろうか？

一般的な印象は、平成の三〇年間で就職の仕方も様変わりしたし、かなりの変化があったというところではないかと想像するが、そうでもない。博士まで進学した人もその課程を修了して社会に出始めたばかりの平成二十五年三月卒業の方々の職場を、先の平成元年卒業の方々の場合と同じ方法で見してみる。情報・経営コンサルタント系が五%程比率を増やし、逆に四%程比率を減らしてしまった建築設計事務所を抜いて、大学・公的研究機関とともに二番目に多い職場になっている。ことくらいが目立った変化で、ゼネコンは更に三%比率を増やして三二%に達している。他は、不動産・鉄道系も金融・保険・証券系も含めてほぼ変化がない。

色々ありはしたものの

「平成」という言葉の響きがまた新鮮だった頃に、大学やゼネコンに勤める先輩・後輩数名と企画編集した『平成建築生産事典』という雑誌の特集号がある（平成六年、彰国社／その後単行本化された）。ふと思いついて、目次を見返してみたところ、平成三十年に出版した本だと言

つてもさほど違和感のない内容だった。私たちに先見の明があった訳ではなく、それほど平成の三〇年間で問題の所在や先端的な技術の方向性は変わっていないということなのだと思ふ。試しにいくつか目次に現れるキーワードを拾ってみよう。文化遺産の保全、資源の再利用、デジタルトランスポート設計、環境共生、ロングライフビルディング、アジア市場の将来、マンションストックの再生、超高齢化社会対応、海外調達、生産拠点の海外展開、グローバルゼーション、異文化交流、生産設計、ビルダビリティ、デザインビルド、生産情報の標準化、バーチャルデザイン、統合CAD、情報ネットワーク、PMrとCMr、総合図、自動化・ロボット化、技能工育成、外国人労働者問題、技能工なしの工業化システム等々。いかがだろうか？

平成の三〇年、色々ありはしたものの、それほど大きな変革期ではなかったのかもしれない。この三〇年の間に、いわばオーソドックスに積み重ねてきたものが、あまり重荷にならずに、これからの変革期に力になるように、再発見と再組織化をすること。新しい元号の時代にはその姿勢が大切になるのだろうかと思つた。